

「大学教員 53 年の経験から」 ～学び、経験、広い視野から～

前川 邦生 氏

私は勝山高等学校を卒業してから大東文化大学に入学して以来、社会人のあいだを含め、今日まで1度も大学の枠組みををはずに人生を送ってきた。

大東文化大学では経済学を専攻していたが、最初に学んだ先生はハーバード大学を出ておられ、白髪で白衣を着ている方であり、この方の師事を仰ごう、ついでいこうと思った1回生の頃を思い出している。課外活動では、剣道部等も経験した。

自分の生まれは遅羽町ほう崎である。当時考えていた将来の展望として、おじやおばが学校の先生であったことから、漠然とだが教育者になろうと考えていた。そんななか、3回生時に出会った方が会計学の先生であり、その方から大学でもうしばらく会計学を深く学んではどうかと打診があったことから大学の教授になる道に進むこととした。

職歴であるが、昭和42年4月1日に大東文化大学に着任し、平成26年3月31日に同大学を定年となった。就職した当時は、厳しい給料体系のなかでの生活であったが、私はお金をいただきながら、自由に学ぶことができる環境が非常にありがたく、楽しかった。

現在は12,000人が在籍する大東文化大学だが、当時は大変小規模であった。そこで、経済学を学び始め、マーケティング、そして会計学という流れで学んでいった。

通常、大学の場合は助手、講師、助教授、教授というように昇格していく。早ければ30歳台の後半から40歳台で、教授に昇格することとなるが、それには論文や授業を行うなどの条件が求められ、自身もそういったチャレンジを行ってきた。

教育者の立場となってからの活動であるが、2年目から簿記の授業を3コマ教えることとなった。当時、同大学の教授から呼び出され、一緒に本屋に行く機会がよくあったことを思い出す。

当時、私とともに助手をしていた女性の先生の1人に年頃のお子さんがおられ、公文式を活用して勉強させていた。公文式は100点になるまで学習を反復する形式のものであり、自分で学ぶことができる。私は、それを参考にして自分なりの問題を制作し、自身の簿記教育に取り入れることとした。そして、日本商工会議所の簿記2級や3級に挑戦する生徒を育成する流れを作った。

本日、別室で講義をしている鳥山昌則氏は勝山高等学校を卒業後、東京で学習して簿記1級を取得し、現在は、税理士として活躍しているが、私はそういった人材を大東文化大学の経済学部で育てることを、目玉、売り物するべきだと思っている。

また、実際に皆さんがこれから講義を受けるときが来たら、その中で自分がヒントを

得る、あるいはチャンスを得る機会をきちんと考え、捉えるんだという気持ちで臨んでほしい。ただ、聞くだけでは何も意味がない。

私が47年間、大東文化大学へ勤務しているうちに47人の税理士を養成した。現在、彼らは全国で活躍しており、今でも教え子との勉強会を年に2回開催している。

簿記について解説するが、簿記は「ビジネス言語」と言われている。会社を経営する立場になると、簿記は絶対不可欠である。正確に偽りなく記帳し、報告しなければならない。そして、簿記の次のステップに登場するのが会計学である。

歴史上にイギリスの産業革命というものがある。人間の力や家畜の力は「ツール」つまり「道具」であるが、これでは作業量に限界があり、これを飛躍的に改善するものとして自動で動くものである「蒸気機関」が誕生した。それが自動車や汽車へと発展する。つまり、ツールからマシンへと発展していく。自動的に物事が行われる動力への移行がまさに、「産業革命」である。そういう世の中に移行することで、市場がどんどん発展していく。ここで、会計学が不可欠なものとなる。

さらに、「減価償却」という考え方がイギリスで登場したが、これがなかったら財務会計は発展していかなかったと思う。それが管理会計へと発展していくこととなる。

少し、自身のボランティア的な活動を紹介する。

先日、中国の湖南省に趣き、現地の日本語学校・湖南大学・湖南農業大学で日本語を学んでいる方たちのスピーチコンテストに参加した。実は、この取り組みを数年間継続して行っている。自己負担で東京のお店でトロフィーを製作し、現地まで持って行っているが、お金が問題ではなく、学生が喜ぶ姿が最高のプレゼントであると思っている。

朝日新聞や日本経済新聞の社説等を読んで良い文章にふれあい、慣れる・学ぶことを繰り返し訓練することにより、自分の文章力も向上していく。そういった日常的な訓練が必要であり、ぜひ皆さんもやってみてほしい。自身がゼミで教えた学生には全員に手紙を送り、そこにぜひとも読んでほしい本を記している。

簿記を学ぶ時、答えは1つであるが、人生の答えは1つではない。経営者には常にPDCAサイクルを意識してほしい。計画して実践し、結果や効果を再確認し、改善して再計画を練る。経営において、考えることはまさにこれである。皆さんは、普段の学習において全科目の予習や復習を実践しているか。

余談であるが、自身が受け持った学生の中にベトナムの方がいる。彼女たちは宿題をする習慣がなく、宿題を出しても取り組むことがなく、させるのに相当苦労した。

本日配布したレジメにみなさんが学習する各種教科の基礎をしっかりと勉強してほしいと記した。10月にノーベル賞を受賞された旭化成の吉野彰先生は、非常に素晴らし

い方だと感じた。吉野先生は「科学だけは、絶対誰にも負けない」という気持ちで学生生活を送ってきたとおっしゃっていた。社会で生活していくうえで様々な専門性を身につける必要がある。そして、人生の最終目標は「人間関係の処理能力」や「総合的判断能力」の向上に努めるという考えを持って努力することであり、吉野先生はこれを体現していると理解している。

いい勉強をして、将来に向けた自己形成をぜひ今のうちから実践してほしい。